

日本人の

れもの

vol.47

京都、こころここに

字を書き始めた
孫が日記につづる
世相の裏表



このころ、娘夫婦がうめ顔をしており、問うてみると、幼稚園の年長組さんになった孫の妻ちゃんは、字が書けるようになり、日記を書きはじめたという。それは、それで嬉しいが、それがまた問題であり、悩みの種のこと。という

例えは、隣のおばちゃんの話「夕べのゴロケは、コンビニで買ったんや。けど、わたがこしらえたと言いつて、いさんにくわたんや」とか。管理人さんのヒゲに「ご飯つが」がついていて「おはようさん。行ついで」と、おじいちゃんやがやるたびに「ご飯つが」もびくびくして、とか。

五階のおねいちゃんや



鴨長明の「方丈記」は、大飢饉の中でも、子どもを思いやり、いたわり合う夫婦の姿も描く。方丈記完成からこととして800年。長明ゆかりの下鴨神社(京都市左京区)では、記念行事が予定されている。

悲惨な「方丈記」の世界の中に 豊かな人間性は満ちていた:

鴨長明の「方丈記」は、大飢饉の中でも、子どもを思いやり、いたわり合う夫婦の姿も描く。方丈記完成からこととして800年。長明ゆかりの下鴨神社(京都市左京区)では、記念行事が予定されている。

戦後、日本人は物の豊かさと引き換えに大切なものを忘れてきたのではないだろうか。日本人が忘れつつある価値観が今も生き続ける千年の都・京都から温故知新の知恵を発信する。(毎週日曜日に掲載します)



おもいやり・いたわりの心

下鴨神社宮司

新木 直人さん



あらき・なおと 1937年、京都市生まれ。全国一の宮会長、全国賀茂社連合理事長。63年、賀茂御祖神社奉仕。2002年から現職。京都市伝統行事伝承者、同伝統芸能功労者。社叢学会顧問なども務める。「世界文化遺産下鴨神社と糺の森」「神游の庭」など著書多数。

レベーターの前でスカートをまくりあげ、ストッキングをなおしていた。などなどさまさま書かれ、夫婦のことは、もっと辛辣なことや、このように親のことを思っていてくれたのかと、嬉しいやら悲しいやらで、このころ、書かれまいとして逃げまわっている、というのである。

うち続いた
大地震・大火、
竜巻、大飢饉……

先日、幼稚園の春休みに里帰りしていたときのこと。近くの糺の森に遊びに出かけたかと思ったら、すぐに友だちをつづつて家に連れて帰り、ひとしきりはしゃぎまわり、いつの間にか、また糺の森へクスかごハサミを持って遊びに出かけた。

いったい何事かと思ったら、色紙で葉っぱや子鳥を切りぬいて写生に貼りつけるという。紙を切るのでクスかごがあるというのであった。その日の日記には、楽しかったし、いっぱい汗もかいた、と書いていたそうである。

政権が交代するという、現代にも似た時代の大きなうねりのなかにあって、人々の生活は混乱し、生きることにさえ迷ったのではないか、という時代を思うからであった。

自分のことは
後まわしにし
相手を気づかっ

長明は『方丈記』の飢饉を描写したくだりに、「いとあはれなる事」と述べ、思いやり、いたわりあふ夫婦は、その思いが飢饉状態のなかでもさらに深まり、どちらか先だってしまう。というのは、自分のことは後まわしにして、相手を思い、ようやく手に入れたわずかのばかりの食糧を譲ってしまう。親子にあつては、なおさらのこと。親が先だつことが多い。

母の命が尽きたの知らないで、いたたい赤ん坊が乳房を吸っているのを見たことがある、と記している。そのような有様なのに、豊かな人間性に満ちた時代背景を知ることができる。

日本の暦

薄暑

猛暑や酷暑はよく聞きますが「薄暑」はご存知でしょうか。「うつすら汗はむほどの暑さ」を言います。梅雨に入っていく直前、5月下旬ごろの気候をうまく言い表しています。季節として大正時代に定着しました。「はんげちのたしなみきよき薄暑かな」(久保田万太郎)



日本舞踊家・NPO法人京都文化企画室理事長 西川 充さん

私のお稽古ごとの一つであった日本舞踊を止めることなくいまに続けている。そして、平成23年度文化庁芸術祭優秀賞をおかけさまでいただくことができた。ようやく舞踊家になったと言えるのではないかと思う。

私が属することのお稽古ごとの世界が、今やとても必要になっているように思う。学校や塾という勉強一辺倒の世界の他に、自分の好きな世界があるということは、ストレスの発散にもなるし、気分転換にもなる。そして、家庭や学校では交わることのない年齢や環境の人とお付き合いすることによって、多様な人間を知ることが出来る。

親や先生から注意を受けることもかつかつかも、若の上のおしよ師匠さんからの忠告なら素直に受け入れられる。一生精進しなければならぬ世界で、非効率的なことの大切さを学ぶ。

「受験には全く益がない、就職には役立たない」と切り捨てて来たお稽古ごとの世界に、日本人の忘れものが一杯詰まっているような気がする。

(「日本人の忘れもの」は、京都新聞ホームページ <http://kyoto-np.jp/kp/kyo-np/info/nwc/>でご覧いただけます)

熱い思いを 伝えたい

紙には、肌を感じる温もりがあり、表情があります。そこに手書きの文字をしたためれば、人柄や情景までもが目に見え、伝わります。多くの人がびとが、PCメールや携帯電話で用件を伝えるようになった今でも紙は、熱い思いを伝える最大のツールだと私たちは信じています。本年で3回目を迎える「恋文大賞」。紙を通して文化を創造する、私たちの大切な活動の一つです。



紙を超え、京都から世界へ 柿本商事株式会社

ESTABLISHED 1845
KYOTO KAKIMOTO
本社 〒604-10915 京都市中京区寺町通二条上ル常盤木町54番地
TEL 075-211-3481(代)
本店営業部
TEL 075-211-3481(代)
TEL 075-662-0131(代)
TEL 075-662-0131(代)
◎紙事業部 出版・商業印刷・パッケージ(etc)
◎Consulting事業部 紙制本 ◎出版情報事業部

柿本商事 検索 <http://www.kyoto-kakimoto.jp/>

第3回 KYOTO KAKIMOTO 恋文大賞

●手紙(文章・詩)部門
●ビジュアル(絵手紙・絵本・Photo)部門

●応募締切/2012年8月31日(金)(当日消印有効) ■問い合わせ/KYOTO KAKIMOTO「恋文大賞」事務局 075-662-0127 平日9:30~17:30
●応募先/〒601-8121 京都市南区上鳥羽大物町19 柿本商事株式会社 恋文大賞係
●入選発表/2012年11月3日(土・祝) 柿本商事のホームページ等で発表 ※過去の入賞作品は「柿本商事」のホームページでご覧いただけます。